

学部名	農学部	学科名	アクアグリーンフィールド学科	2026年度 カリキュラムマップ
-----	-----	-----	----------------	------------------

アクアグリーンフィールド学科のDP(ディプロマ・ポリシー)				
アクアグリーンフィールド学科の教育研究及び人材育成の目的は「1次産業全般を俯瞰した上で、水圏環境や森林環境を保全し、それを利用する持続可能な新産業の形成に貢献するため、自然生態系とそれらを構成する生物特性さらには自然環境の仕組みを深く理解するとともに、自然環境下における野外活動に必要な技能やコミュニケーション能力、協働する力及び専門的知識を身につけつつ、自然環境を取り巻く人間社会生産構造をも理解する視座の高い人材を養成する。」であることから、以下のとおり、「自ら学ぶ力」、「生きぬく力」、「可能性を信じる力」、「世界と調和する力」の4項目にまとめ本学の学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)とします。				
自ら学ぶ力	DP1 知識・技能	第1次産業を基盤とした生態系サービス・農山漁村の多面的機能の基礎的な知識、食品ビジネス分野の基礎的な知識と技術を身に付けている。		
	DP2 情報の活用	水圏・森林圏・里地に関する膨大な情報の中から重要な情報を抽出し、正しく解析する分析力を身に付け、解析結果を有効に活用できる。		
	DP3 主体的な学びと論理的な思考	自らが問題意識を持ち、自主的に学び、科学的な知識と論理的な思考により、自分自身を成長させようと思意を持ち続けることができる。		
生きぬく力	DP4 コミュニケーション・表現力	聞く力、話す力を共に身につけ、自分の意見をしっかりと伝えることができる。これによってさまざまな人とのコミュニケーションを図ることができる。		
	DP5 グローバルな視野と地域貢献活動	国際社会における視点から地域を捉え、個性あふれる、生き生きとした地域を創造するための意欲と活動能力を身に付けている。		
	DP6 課題解決力	社会における諸課題を掘り起こし、これを解決する方法を見出して提案するとともに、自らが社会を生きぬく力を身に付けている。		
信じられる力を	DP7 自己効力感	失敗や成功の原因を明らかにできる力をもち、何らかの課題に直面したときにも、自己の知識、技術、洞察力、実行力を信じて課題解決に立ち向かう力を身に付けている。		
	DP8 SDGsの達成を目指して	環境保護、貧困からの脱却などSDGsの掲げる達成目標を理解し、生物生産・環境保全分野及び地域振興・食品ビジネス分野でどのような貢献ができるのかを考え、行動する。		

◎:科目の到達目標が該当のDPIに直結する科目(100%)					○:科目の到達目標が該当のDPIに関わる科目(70%)					△:科目の到達目標が該当のDPIに少し関わる科目(30%)				
授業科目	◆は必修	単位数	配当年次	履修期	主要授業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
◆ 南あわじ農業学		2	1	春	○	南あわじ地域は、温暖な気象条件や排水の良い土壌条件などに恵まれた農業・漁業に適した地域であり、主要品目である「たまねぎ・レタス」、「酪農・肉用牛」、「海苔・わかめ」等の生産の歴史や技術の変遷、生産技術の特徴や発展経過、担い手の育成対策など、南あわじ農業全体（生産・流通・加工）の現状およびそれを育ててきた背景などを学ぶ。		○			◎	△		
◆ アクアグリーンフィールド学概論		2	1	春	○	本講義では、アクアグリーンフィールド学科で何を学ぶかを要約して講述する。海、川、里、山に生息する生物や生態系の持つ魅力を学び、その産業適用への可能性、それを保全し利用することを通しての地域活性化、それらに関する研究の実例などをオムニバス形式で紹介し、受講する学生が生物や生態系の応用価値を知ることで、その後の専門授業での教育効果を高めるための多角的視点を養う。	◎	○	○					○
◆ 基礎演習Ⅰ		1	1	春	○	基礎演習Ⅰでは、まず大学生活に溶け込み、今後の学習を円滑に進めていくための支援として、大学キャンパスのある高梁市、南あわじ市の文化・産業などについて体験的に学びながら、仲間・人間関係の構築を目指す。到達目標は、高梁市、南あわじ市の文化・産業についての基礎知識を得るとともに、学内の人間関係を築くことである。		○		○		◎		△
◆ 基礎演習Ⅱ		1	1	秋	○	基礎演習Ⅱでは、大学・学科への所属意識を高め、人間関係を豊かにするとともに、学修基礎力を涵養することを目指す。到達目標は、吉備国際大学生としてのアイデンティティの形成と仲間づくり、大学における居場所づくりの進展、そして、情報を収集・整理し、それをわかりやすく発表できることである。		○		○		◎		△
◆ 基礎演習Ⅲ		1	2	春	○	専門分野における総合的な課題探究能力・主体的判断能力の育成を目指して、教養教育と専門教育の有機的連携を考察する。教員から与えられる専門情報に関して、受容から獲得へ、学修から研究へと、理解を深め、専門的知識を演習グループの共通認識へと高めていく。		○		○		◎		△
◆ 基礎演習Ⅳ		1	2	秋	○	資料や文献を検索し、体験と運動させて、情報の専門的解釈および記録の方法を学修する。学習内容を、グループ研究の形で共同研究発表や討議などを通して演習グループの共有財産に高める。知識に対する自己自身の姿勢を社会との関連で理解し、将来的自己の専門家としての主体性（モチベーションとアイデンティティ）と活動内容を考察する。		○		○		◎		◎
遺伝学		2	1	秋		生命現象の多くは、遺伝現象と密接に関係している。したがって、生命科学を学ぶ上で必要な遺伝現象を深く理解することが重要である。講義では、細胞周期、体細胞分裂、メンデル性遺伝、遺伝形質、細胞遺伝、および集団遺伝について解説し、遺伝現象の詳細および研究方法などについて理解を深める。	◎	○	○					
分子生物学		2	2	春		クローン技術とは？遺伝子組換え作物とは？最近のバイオテクノロジー分野の進歩は目覚ましく、実験室での基礎研究から、各産業分野での製品開発まで幅広く展開されている。農業分野においても、品種改良や選抜育種などに利用され、次世代農業へのアプローチが期待されている。分子生物学とは生命現象を分子のレベルで説明する学問であり、バイオテクノロジーの大躍進も、分子生物学の成果なしでは起こり得なかった。講義では、遺伝子とは何か、遺伝子はどのように複製されるのか、遺伝子の情報はどのように伝達されるのか、またその情報から細胞は何を作り出すのか、等の分子生物学の基礎的事項を分かりやすく解説する。	◎	○						○

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授 業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
専門 基礎 科目	ゲノム情報学	2	1	秋		ゲノムとは、生物を作り出し、その生物が生命活動を営むために必要最小限の全遺伝情報である。ゲノムや遺伝子を研究する生命科学分野をゲノム科学という。一見、農業とゲノム科学は無関係のように思われる。しかし、私たちの身の回りには様々な品種の違いは、ゲノムに書き込まれた遺伝情報の違いに起因する。品種に適した栽培法の開発や新たな特性をもつ新品種の育成など、これらの農業においては、「生命の設計図」であるゲノムを理解することが非常に重要である。本講義では、ゲノムがどのようにして生物を作り出すのかを中心に、ゲノム科学の重要性とおもしろさについて解説する。	◎						○	
	植物生理学	2	1	秋		本講義で取り上げるのは植物生理学の分野の中でも、植物の栽培に関連深い内容である。すなわち、光合成と呼吸、植物栄養元素の吸収と代謝、環境ストレス（高温・低温、乾燥・塩分および酸性土壌）に対する植物の反応、二次代謝産物の役割を主に取り上げる。関連分野である遺伝学・分子生物学、植物生態学についても必要に応じて説明する。	◎		△				○	
	生物の進化と多様性	2	1	春		地球と生命の誕生、多様な生物の進化および地球生命共同体を構成する生物種について理解し、持続可能な地球環境生命体を維持することの必要性と、食料ならびに環境資源としての植物の重要性を学ぶことを目標とする。地球の誕生後、原始生命体の誕生に至る進化、さらに細胞の共生等を経て多種多様な生物種へと進化した過程と生物分類について解説する。また、食料ならびに地球環境資源として不可欠な植物については、光合成能力の獲得や陸上生活への適応、生殖様式の進化などについて講義する。	◎	○	○		○			
	◆ 海洋水産生物ビジネスの技術と倫理	2	1	秋	○	レジャー、漁業、食品加工など、水圏環境、海洋生物や水産資源を利用するビジネスにおいては、安全性、不当表示、乱獲による生物資源の減少、海洋プラスチックゴミ等の海洋汚染など、1次産業や食品業界を中心として様々な問題がとりざたされており、それらには、生産者、技術者、事業者の倫理的な姿勢が大きく関係している。この授業では、様々なアクアビジネスにおける技術開発事例から、現場での技術開発の実例を通して、その技術・倫理的問題点やその解決方法、さらに、それぞれのビジネスのシーンでの水圏環境や生物種を保全するために必要な知識を習得することを通して、生産者、技術者、事業者として必要な倫理感を養うことを目的とする。			◎		○	○		○
	海洋水産生物ビジネスの経済と流通	2	1	春		レジャー、漁業、食品加工など、水圏環境、海洋生物や水産資源を利用するビジネスという経済活動のなかにおける流通活動・商業活動の意味や役割について理解し、その仕組みや制度について知識を習得することを目的とする。レジャー産業が6次産業化に関連するスモールビジネスの実態や、今後のグローバル化やネット全盛の流れのなかでの消費や流通活動のあり方について解説する。また、水産物の流通に関わる基本的な考え方や基本用語について解説し、様々な小売業のかたちとその活動内容について、地域の事例を交えながら紹介する。				○		○		
	生物化学	2	2	秋		生物化学（Biochemistry）は生体分子を取り出し、その構造と機能を調べ、それら生体分子間の相互作用の解析を通して、生命現象を説明しようとする学問である。本講義では、生体を構成する炭水化物、脂質、アミノ酸とタンパク質、核酸とその成分、酵素に焦点を当て、それらの基本的な構造と機能について講義する。	◎		△					
	有機化学	2	2	秋		有機化学における化学結合と構造、化学反応、および立体化学などについて入門的に解説する。講義前半では、基本的な化合物（メタン、シクロヘキサン、エチレン、アセチレン、ベンゼンなど）の化学結合と構造、反応性および立体化学などについて解説し、より複雑な化合物系への応用ができるようにする。講義後半では、分子の世界のなかで、生体機能分子を取り上げ、有用天然物の化学、血液型と糖化学、物の見える仕組み - 視覚と分子、味覚、嗅覚と分子、薬の功罪 - サリドマイドの復活、などについて概説する。	◎		△					
◆ 食の安全学		2	1	春	○	われわれの周りには食品の安全に関する諸問題が数多く存在し、われわれの健康を危うくする事態にまで至る場合もある。したがって、どのようにして食品の安全の問題が生じるのか、また、その対策法を学修することは、食品の製造・販売に携わる側のみでなく、消費者の立場からも重要である。そこで、本講義ではまず食品の安心・安全に関係した衛生管理の基本を解説する。さらに、食品の偽装問題、放射能汚染に対する風評被害などの事例を紹介しつつ、食品製造・販売に対する技術者倫理の重要性とともに、消費者への科学知識の正確な情報伝達の重要性を解説する。また、科学倫理、科学コミュニケーション、リスク管理を学修し、これらを通じて、食品の研究開発や、食品流通に携わったときに生ずる諸問題に対処できる能力を養う。	◎	△					○	

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授 業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
◆	生物学実験	1	2	春	○	食資源生物の生産維持管理にかかわる植物および微生物についての基礎知識および実験技術を取得するため主としての実習を行う。	○		◎	○		○	○	
	化学実験	1	2	春	○	化学物質の扱い方、火器や化学分析機器の安全な扱い方、有害物質の廃棄方法などを詳細に口述し、事故の危険から自分と周囲の人たちを護る方法を説明する。そして、化学実験の手順、分析方法の手順、分析結果の計算方法などを詳細に説明し、下記に示した順に実験に着手し、水分量、脂質量、タンパク質量、およびミネラルである灰分量の重量法による定量、そして、炭水化物の発色法での分光学的定量を行う。また、行った実験の手順と結果をまとめた的確に報告する分析報告書の書き方を説明する。	○		◎	○		○	○	
◆	アクアグリーンフィールド学Ⅰ	2	2	春	○	アクアグリーンフィールド学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、海、川、里、山の生態系の特徴や生息する生物の魅力を知り、それらを観察し、楽しむための野外活動の技術や安全確保、さらには、エコツーリズムやサステナブルツーリズム等による地域活性化や生態系の保全維持活動の重要性について学習する。特にこのアクアグリーンフィールド学Ⅰでは、河川湖沼の物理化学的環境、魚類の分布や生態について、研究の実例などを交えながら講述する。	◎	○			○			
◆	アクアグリーンフィールド学Ⅱ	2	2	春	○	アクアグリーンフィールド学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、特に川、里、山の生態系の特徴や生息する生物の魅力を知り、それらを観察し、楽しむための野外活動の技術や安全確保、さらには、エコツーリズムやサステナブルツーリズム等による地域活性化、そして、生態系の保全の重要性について学習する。特にこのアクアグリーンフィールド学Ⅱでは、こうしたフィールドの四季を味わい楽しむためのアウトドアライフの技術や注意点、研究調査に必要な野営の方法、そうしたフィールドでの事故防止対策、等について、実例などを交えながら講述する。	◎	○		○				○
◆	アクアグリーンフィールド学Ⅲ	2	2	秋	○	アクアグリーンフィールド学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、特に川、里、山の生態系の特徴や生息する生物の魅力を知り、それらを観察し、楽しむための野外活動の技術や安全確保、さらには、エコツーリズムやサステナブルツーリズム等による地域活性化、そして、生態系の保全の重要性について学習する。特にこのアクアグリーンフィールド学Ⅲでは、関係人口を増やしながらか生態系を保全する方法、自然再生技術、等について講述する。		○	○		○			◎
	山・里・海の連携学	2	2	春	○	地域資源の源である山、里、海の生態系としての構造と機能について基礎的な理解を深めるとともに、それぞれの連関や人間活動との関わりについての仕組みを考察する。また、現在みられる里山や里海の歴史の変遷を人間の生業の変化や気候風土との関連として学び、地域で起こる問題を長期的・総合的な視野で主体的に考え、持続可能な未来のために何が必要であるかについて具体的に地域が抱える問題を題材に講述し、グループ討論も逐次取り入れ実例を交えながら授業を行う。			○					
	森林生態管理学	2	2	秋	○	本講義では、森林生態系についての基礎知識を身につけ、森林をとりまく諸問題について理解する。前半は森林生態系についての基礎知識を教授し、後半は、具体的な問題事例について解説したのち、グループディスカッションを行う。保全生態学分野の専門教員が担当する。					○			
	昆虫科学Ⅰ	2	2	秋	○	昆虫類は種数、形態、生態のいずれの面でも、地球上の動物の中で圧倒的な多様性をもつ一群である。本講義では、昆虫類のもつ多彩な形態や生態、その進化的な背景について学び、昆虫類の基本的な知識を身につけることを目標とする。	○							

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授 業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
フ ィ ー ル ド 生 物 系 科 目	昆虫科学Ⅱ	2	3	春	○	昆虫類は、時に害虫、時に絹糸やハチミツを提供する有用動物として、人類と関わってきた。また、昆虫類にとっては、人間は環境の改変や移入種の持ち込みを通して、大きな影響を与える存在でもある。本講義では、昆虫と人間の関わりと、人間が昆虫に与える影響について学び、昆虫と人間の在り方を考える基礎知識を身につけることを目標とする。	○							
	水辺ビオトープ	2	3	春	○	水辺の野性の生きものたちが生息する空間である水辺ビオトープは、水域と陸域をつなぐ場でもあり、多様な種が生息する重要な場所である。その生態系は人間活動や気候変動等により大きく変化しており、また、外来種の侵入によって絶滅の危機に瀕している在来種も多い。ここでは、水辺ビオトープの意義や実体、その整備や維持管理方法について、事例を交えながら講述する。	○					○		
	水生生物学Ⅰ	2	2	春	○	水生生物学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、水圏に生息する生物について、分類、生理・生態、人との関わりについて学ぶ。種に固有の話題、たとえば、種名や学名がそのように名付けられた理由、奇妙な生態、特有の食味や利用方法などについて学習する。特にこの水生生物学Ⅰでは、産業上極めて重要な動物群である、貝類やイカ・タコを含む軟体動物、エビやカニなどの甲殻類を含む節足動物、ウニやナマコを含む棘皮動物を中心に、水圏の無脊椎動物全般について生物学的に理解し、種の特徴を総合的に説明できることを到達目標とする。	◎							
	水生生物学Ⅱ	2	2	春	○	水生生物学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、水圏に生息する生物について、分類、生理・生態、人との関わりについて学ぶ。種に固有の話題、たとえば、種名や学名がそのように名付けられた理由、奇妙な生態、特有の食味や利用方法などについて学習する。特にこの水生生物学Ⅱでは、脊椎動物のうち、サメやエイなどの軟骨魚類やシラカンサ、ウナギ、ニシン、コイ、スズキ、カレイやフグ類などの硬骨魚類、そして、ウミガメやクジラなどの海獣類について、生物学的に理解し、特にアクアビジネスと関係する主要な種類や分類群について、特徴を総合的に説明できることを到達目標とする。	◎							
	水生生物学Ⅲ	2	2	秋		水生生物学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、水圏に生息する生物について、分類、生理・生態、人との関わりについて学ぶ。種に固有の話題、例えば、種名や学名がそのように名付けられた理由、奇妙な生態、特有の利用方法などについて学習する。特にこの水生生物学Ⅲでは、プランクトンと海藻を扱う。浮遊生物であるプランクトンは、多様な生物群からなり、動物の浮遊幼生も含まれており、海洋生産を支える生物群として重要であることを理解する。また、海藻については、特にアクアビジネスと関係する主要な種類や分類群について、特徴を総合的に説明できることを到達目標とする。	◎							
	水圏の環境と保全	2	2	秋		本講義では、海洋環境、特に沿岸域の環境を成立させる自然の仕組みについて、海水の流動や低次生産や有機物の動態等から総合的に解説する。また、沿岸域で起きている深刻な環境問題について紹介し、里海という概念の下、環境を保全・修復するために何をすべきかを理解させる。これらによって、沿岸の環境保全に必要な知識を習得し、個人としてのアクションプランを持つことを目的とする。さらに本講義では、河川や湖沼、ため池など、いわゆる陸水の環境について広く学び、陸水域の物理・化学・生物学的特性などについて理解を深め、水辺の生態系の重要性について認識する。また、水辺ビオトープ、多自然川づくり、水辺の小わざ（生物の視点からの安価で効果的な近自然工法）による理念を理解し、地域において、陸水環境の保全を進め、持続的利用をするために行動することができることを目的とする。			○					
	アクアリウムサイエンスⅠ	2	2	春		アクアリウムサイエンスⅠ・Ⅱでは、水圏に生息する生物の採集、繁殖、展示など、水族館や鑑賞魚ビジネスと関連する内容について総合的に学ぶ。このアクアリウムサイエンスⅠでは、小水槽での生物飼育方法や生物の調達方法、水族館の飼育観覧施設、生物の調達や疾病への対策について学習することで、水生生物を小スケールの水槽で継続飼育できるようにすることを目的とする。また、水族館の歴史や生物展示方法などを学習して、水族館の設置意義、施設や業務を理解する。			○					
	アクアリウムサイエンスⅡ	2	2	秋		アクアリウムサイエンスⅠ・Ⅱでは、水圏に生息する生物の採集、繁殖、展示など、水族館や鑑賞魚ビジネスと関連する内容について総合的に学ぶ。このアクアリウムサイエンスⅡでは、魚類や水生無脊椎動物を中心とした水生生物のうち、水産増養殖の対象種とはなっていない鑑賞魚や希少種の繁殖や鑑賞魚ビジネスについて学習することを通して、水生生物の研究教育の魅力を理解し、鑑賞魚ビジネスに必要な実用的な知識を身に付けるとともに、希少種の遺伝子バンクとしても機能している水族館の役割等を説明できることを目指す。		○	○					

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授業 科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
	フィッシングサイエンスⅠ	2	3	春	○	フィッシングサイエンスⅠ・Ⅱでは、水産生物を捕獲するための手段である「釣り」と「漁業」を扱う。お手軽に行える狩猟である「釣り」は、近年ますます人気が増している。海辺や水辺では、釣りができることが魅力の一つとなっており、ビジネスを生むレジャーの一つである。講義では、初心者でも釣りが始められるように配慮しながら、釣りを本格的に追求したい者にはデータ蓄積の重要性や、釣果を上げるためのヒントとなる事項について解説する。映像を多用し、確実に釣果をあげるベテランや釣り具業界の技術者らが経験に基づき講述し、今後の釣りによるビジネス展開についても考える機会とする。			○					
	フィッシングサイエンスⅡ	2	3	秋	○	フィッシングサイエンスⅠ・Ⅱでは、水産生物を捕獲するための手段である「釣り」と「漁業」を扱う。このフィッシングサイエンスⅡでは、漁業を総合的に扱い、関連法規、漁具、漁法、資源管理、沿岸漁場整備、漁港や漁船について学習して理解し、漁業専門用語を身に付けることを目的とする。現在行われている漁業について、法律規則、漁具、漁船の種類や構造の特徴、主要漁業の漁法について、映像をふんだんに使って講述する。また、水産資源の管理や沿岸漁場整備については、地域で実施されている内容を紹介する。また、漁港や漁船についても解説し、未来の漁業の在り方について考察する。		○	○					
	海川の生物とレジャー	2	2	春		海と川のレジャーとそれを利用した観光ビジネスについて総合的に学習する。その結果、地域の活性化のために、海や川の特性を活かしたレジャーをビジネスへ結びつける方法について説明でき、それを実現するための生態系サービスの重要性について理解することを授業の目的とする。海や川で子どもたちに伝わる伝統的な遊びを理解し、流木や転石を利用したアートによるビジネス、また、フィールドの特性を活かしたスポーツについて紹介する。また、学習を深めるために、映像を使ってその魅力を伝えるときともに、事故や漁業者等とのトラブルを未然に防ぐためのポイントについて説明する。			○	○				
	生物統計学	2	2	春	○	統計学は実験や調査で得られたデータを整理し、解析し、特徴を抜き出すために欠かすことのできない道具である。生物統計学では、基本統計量の算出、仮説検定、回帰分析について、表計算ソフトの関数や分析ツールの援用により、データに応じた適切な方法を選んで結果を解釈できるようになることを目標とする。	◎	○						
◆	アクアフィールド実習	1	1	春	○	海や川やため池などのフィールドでの観察や採集した生物の飼育を通して水生生物の生態を観察し、生物学的な面白さを理解する。また、水圏フィールドにおける生態系保全の重要性を体感する。また、水を利用する水稻耕作を経験し、圃場生態系のあり方を学ぶ。さらに、沿岸や河川を利用した観光産業に触れることで、それらが地域の生物や環境に立脚して成立していることを考え、水辺の地域活性化には、水圏の環境や生物の特異性を活かした活動が有効であることを理解する。これらの実習を通して、専門知識を深化させることへの動機付けを行い、その後の学習を加速させることを目的とする。		○			○		○	
◆	グリーンフィールド実習	2	1	春	○	山や里で自然に親しみ、生物の多様性を観察しながら、生態系サービスを活用するためのシーズの存在を体感する。キャンプ実習では、日常からの解放感など自然の深い魅力について学び、火の扱い方や食事づくりなどのアウトドアライフの基本技術を学ぶ。また、バードウォッチングや昆虫採集の方法をフィールドで学習する。さらに、里山の食用資源の調査やため池の生物や環境調査、フィールドビジネス関連施設見学を実施する。これらの実習によって、山や里の自然の魅力を再発見してもらうことで学問的視野が広がり、ライフプランやキャリアプランの構築にも役立つ。		○			○		○	
	生涯学習概論	2	2	秋		生涯学習及び社会教育の本質と意義、学説、法令、行政の施策、社会教育と学校教育・家庭教育の連携、専門的職員の役割、市民の学習活動への支援等、生涯学習論の必須事項を広く理解することを通じて、社会教育の重要施設である博物館の学芸員やその他職員として活躍するための基礎的能力を養うことを目的とする。	△							
	博物館概論	2	2	春		博物館とはいかなる存在であるかを学ぶ。博物館の歴史を通じて博物館の概念を理解し、博物館法を熟読して基本的認識を深める。とりわけ、博物館の機能について考え、これからの地域、社会との関わりにおいて、その存在意義を明らかにしていく。	△							

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
学芸員科目	博物館経営論	2	3	春		博物館経営が、諸般の社会情勢によって困難なものとなってきた今こそ、存在意義を明示しつつ社会のニーズを取り入れて、博物館という存在をアピールすることが求められている。経営の安定は博物館本来の目的を達成するにあたって必要不可欠なものであり、適切な組織構築とニーズに合致した経営手法の導入によって経営基盤を整えなければならない。そのためのさまざまな方策や他団体との連携協力などについて考察を行う。		△						
	博物館資料論	2	3	春		博物館資料とは、博物館がその機能を果たす上で必要な「もの」と、それについての情報であり、「もの」は資料化されて初めて展示教育や学術研究に利用することが可能となる。この資料の概念と資料化の過程を学び、活用へとつなぐ。殊に資料化に関する業務や保存・公開についての講義は、実習や作業を交えながら具体的に進めていくこととする。			△					
	博物館資料保存論	2	3	秋		文化財の適切な保存環境について、保存化学的な知見に基づく知識を学び、それをもとに温度・湿度を中心とした種々の環境について各種の測定器を使用して実習により、広く環境調技術のスキルを身につける。			△					
	博物館展示論	2	3	秋		博物館が一番に来館者と向かい合う場合は「展示」。上手に展示しなければ、展示する意味を減じてしまう。その展示の歴史や展示の諸形態に関する知識や理論、技術等を学び、博物館が有する展示機能について理解を深めると同時に、実際に展示を行う上での基礎的能力を養う。まとめとしては、受講生が実際に博物館での展示をレポートさせて館側の意図を学ぶと同時に、その試みが来館者に伝わり、目的を達成しているか否かといったことについて討論を行う			△					
	博物館教育論	2	4	春		博物館における教育活動の基盤となる理論や実践に関する知識と方法を習得し、博物館教育の意義と特性を理解した上で、生涯教育の拠点としての機能の充実を図り、また学校教育などとの連携を行うための能力を養う。あわせて、世代を超えた市民参画の場となるワークショップやボランティア活動の現状と課題について語りあい、参加意識の向上に努めるような授業を行うこととする。		△						
	博物館情報・メディア論	2	4	春		博物館における情報・メディアの現状を把握し、情報の管理・発信についての実践例を学ぶ。併せてデータベースの基本的な構築法を知り、デジタルアーカイブや著作権などといった知的財産に関する問題をふまえた上で、各種メディアを効果的に活用した情報発信のあり方について理解を深める。		△						
	博物館実習	3	4	4通		事前指導において学芸員としての心構えの説明を行ったのち、企画テーマに沿った資料収集や取り扱い、展示・調査等の実務実習を行うとともに、多様な館種見学を行い、実際に博物館において行われている展示方法やレイアウトなどを学ぶ。また学芸員として必要な専門知識や技術を身につけるため、博物館の現場で実物資料に即した博物館の活動を体験し、その館園で実際に実現可能な活動を自ら企画・立案する。さらに館園実習の事後指導として、実習を体験しての反省や自己評価等をもとに、これまで行ってきた学内実習での企画テーマにおける資料収集や取り扱い、展示・調査についての課題解決に取り組む。			△	○				
	水産食品学	2	2	秋		水産食品について、加工原料としての性状、貯蔵方法、各種の加工方法（冷蔵、冷凍、乾燥、くん製、塩蔵、発酵、調味加工）について学び、また、缶詰やレトルト食品、魚肉練り製品については、基本的な製造方法や規格、変敗防止方法などを学習する。さらに加工方法や使用される機器類について学び、また、水産食品に含まれる機能性を理解し、廃棄物の処理や経営についても学び、総合的に理解することで、地域における新しい地域特産物の開発や6次産業化に役立つ知識を身に付けることを目的とする。	◎	○						

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授 業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
食品化学系科目	食品化学	2	2	春		食品分析法について解説を加えた後、食品の主要成分である、水・タンパク質・糖質・脂質および微量成分について、その科学的特徴を解説し、併せて、主要食品成分の化学変化や成分間相互作用についても解説を加える。この科目は、大学で食品学研究室を担当していた教員が、その経験を活かし、食生活において実践的に役立つ授業を実施する。	◎	○				△		
	栄養化学	2	2	秋		糖質、タンパク質、脂質、ビタミン、ミネラルといった栄養素が体内でどのように変化し、働いて体成分と成ったり、エネルギーと成っているかを概説する。そうした代謝過程で何がキーポイントとなっているかを解説する。この科目は、大学で栄養学を担当した経験を持つ教員が、その経験を活かし、食生活現場で実践的に役立つ授業を実施する。	◎	○	△					
	食品機能分析化学	2	3	春		食品には多くの成分が含まれ、それぞれが様々な「機能」を有している。食品の「機能」には、一次機能（栄養性）、二次機能（嗜好性・食感）、三次機能（保健機能性）があり、私たちの日常生活に深く関わっている。健康の維持・増進のための食生活は「栄養バランス、栄養所要量、食事摂取基準」を参考にすることができる。本科目では、生体調節機能を有する食品成分の分析方法の原理ならびに実際の方法を理解し修得することを目指す。つまり、特定の食品成分が、分析対象の試料中に含まれているのかどうか、また、その量はどのくらいであるのかについて、化学的な手法で調べる（分析する）手法について学ぶ。関連科目として「化学実験」や「生物学実験」がある。これらの実習科目で得た知識・技術に関連して、各種食品素材からの食品成分の抽出・単離法から、食品成分の定性分析・定量分析に至るまでの各種分析法を解説し、	◎	△	○					
	食品加工化学	2	2	秋		食品を構成している多様な成分をすべて説明し、そのそれぞれを食べたときにヒトに与えるうま味、苦み、まろ味などのヒトの感覚に対する働きを講述する。そして、美味しさや健康に好ましい機能性を維持したまま、食品を加工する方法を説明する。また、消費者ニーズに合わせた、よりよい加工方法の開発を論じる。	◎				○		△	
	食品管理化学	2	3	秋		食品の安全性確保のためにいくつかの法規があり、国内の食品加工と流通・販売に関しては食品衛生法が、農畜水産物の生産と流通に関しては日本農林規格（JAS）がある。また、食品の生産加工法の基準としてHazard Analysis and Critical Control Point（HACCP）があり、食品の流通基準を世界共通に定めたCodex Alimentarius（CODEX）がある。本講義では食品の安全性を守るためのこれらの規則・規準を、過去の事故例や法が定められた経緯などを説明しつつ、実例を挙げてわかりやすく講述する。	○		◎		△			
	食品衛生学	2	2	秋		食品衛生とは食品、添加物、器具および容器包装を対象とする飲食に関する衛生であり、食品が健康障害をもたらさないようにするため、非衛生的な事態の発生を防ぐ努力・知恵・工夫である。そこで、食品衛生に関する法整備、食品が健康障害をもたらすようになる原因（食品そのものの変化、食品中の有害物質、有害微生物）、さらに食品包装・衛生管理を解説する。	◎		○			△		
	微生物学	2	2	春		ヒトと多様かつ密接な関わりをもつ微生物の基本的概念を理解し、肉眼では見えない微生物への認識を深める。前半では微生物学の基礎（歴史、分類と性状、生理）、病原微生物と免疫などを講述する。後半では、微生物と土壌や水圏環境の関わりに着目し、微生物の環境への適応能力や、環境浄化作用について解説する。また、食に関連した有用微生物、食中毒と有害微生物、バイオテクノロジーの基礎と応用面で微生物の果たす役割などについて、食の安全性に関する最近の話題を加えて紹介する。	◎	○				△		
	醗酵微生物学	2	3	秋		微生物研究の歴史、微生物の分類、微生物細胞の構造、微生物の生理と代謝、醗酵の基礎などについて順次講義を進め、無理なく応用微生物学の基礎を学ぶ。	◎	○	△					

授業科目 ◆は必修		単位数	配当年次	履修期	主要授業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
	水産物加工学	2	2	春		水産加工品の加工工程に含まれる作業のポイントと目的を科学的見地から解説し、加工技術、保蔵技術、品質評価の方法を講述する。また、地域の試験研究機関で行ってきた、水産物の加工・流通に関する仕事の内容を紹介し、製産現場で実際に使われている加工技術、保蔵技術、品質評価方法について解説する。	◎	○					△	
	農産物加工学	2	2	秋		本講義は主要農作物（米、麦、大豆）を中心として、農産加工の面から多様な品種特性の違いを論ずる。醸造用玄米はデンプン特性など一般食用米品種とは異なる機能が求められる。小麦粉ではパン用、麺用、菓子用でそのタンパク質組成や機能も異なる。そのため同じ作物でも加工用途により異なる特性が求められ、品種や栽培技術の開発が進められてきた。こうした食品としての利用される農産物の構成成分を縦糸とし、栽培される品種を横糸にその加工適性について概説を行う。	◎		○			△		
	食肉加工学	2	3	春		我が国の食肉生産の特徴とその背景、家畜の筋肉が死後の熟成による種々の変化を経て食肉に変換される過程、及び食肉の構造と化学成分の特性に応じて製造される肉製品に関する知識を習得することを到達目標とする。	◎							
	乳製品加工学	2	2	秋		牛乳の化学成分の理化学的・栄養生理的特性、および機能性を講述する。乳酸菌・ビフィズス菌についての基礎知識を得る。さらに保健機能食品制度の概要および乳製品で特定保健用食品に選定されている科学的根拠について学ぶ。	◎							
	味と食感の科学	2	3	秋		本講義では味（五味以外に、最近では「油味」を加えて「六味」とする場合も多い）を、味蕾細胞表面に存在する受容体による味覚感知の仕組みも含め、食品素材による味の違い、食品物性の意味、物性に及ぼす素材など、多方面からの味に関する講義を行い、食品のおいしさを総合的に理解することを目指す。また、味覚・嗅覚の発達・老化、形態を調整し食感を改良した食品、食品産業に関わる香気や臭気について詳細する。さらに、ここ十年、急速に進展してきた味センサー、匂いセンサーの仕組み、官能評価結果、産業応用例なども紹介する。	○		◎		△			
◆	自然食品学実習	1	3	秋	○	海川の恵みである天然魚、生産された野菜や穀物、山や里の恵みである野草、香草、山菜やジビエなど、は伝統的な食品として利用されているものもあれば、新たな加工方法により地域特産品として人気のある商品も開発されており、地域を元気にするシーズとして重要である。ここでは、できるだけ自然食品を使い、魚の基本的な調理加工法、地域の農産物を使った料理や菓子の作り方、農山漁村の伝統的な餅の作り方等について実習する。	◎					○		○
	地域調査法	2	3	春	○	地域調査に関する十分なスキルを身につけ、不足なく事前準備を整え、適切に現地調査を実施し、得られたデータを最大限に有効活用すべくその整理と分析にあたる。膨大にある既存のデータベースのなかから適切な地域情報にアクセスして分析にあたる。学生がこれら一連のプロセスを自らの計画のもとでおこなえるようになるための授業を提供する。	○	◎						
	地域社会学	2	3	春		農村部と都市部はともに人々が暮らす地域である。これら双方の違いは産業構造の分布で分けられることが多いが、それだけで二分されるわけではない。地域で暮らす人間を基準に考えれば、対人関係のありよう、家族・親族関係のありよう、協働と分業のありかたにも違いがある。また、地方自治体の枠組みは平成の大合併を経て人々の生活にいかなる影響を及ぼしているのか。地域社会学の研究蓄積を踏まえて、地域で生きる人間のありようを考える。			○			◎		

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授業 科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
地域 創 成 系 科 目	農業・食品業の地域ブランド戦略	2	3	秋		商標法、地理的表示保護法の基礎を理解するために、平易なレジュメを使用し、具体的な戦略事例を折り込み、わかりやすく説明する。レジュメを予め渡すので、必ず予習・復習すること。あわせて、国家試験「知的財産管理技能検定（3級）」の問題を取り入れ実践的トレーニングを行う。					○			
	食と農のデザイン論	2	3	秋		「食と農」は幅広い分野を包含する複合的な学問領域である。本講座では、デザイン（ビジネスモデル）に落とし込んでいくことを目的とするため、農業、流通、消費、環境共生、マーケティング、情報社会などについて基礎的な理解を深めたのち、様々な具体例から食と農のデザインを学ぶことにより、知識としてではなく課題解決の手段として活用できる能力を高める。1次産業の担い手を目指す学生向けではあるが、食産業や地域にかかわる産業への道を目指す人を想定しており、その自覚と意欲をより高めるため、適宜ディスカッションを行い、受講者の意見の発言を求める。						○		
	ランドスケープデザイン学	2	3	秋	○	生態系で空間のレベルを分け、それぞれに関連する植物や構造物の配置、自然環境の影響や産業への応用など、人間活動との関連について講述する。また、それぞれの生態系における生物との関連についても解説する。快適な空間デザイン能力が身につくように討論を交えた授業を行う。	○					△		
	ソーシャルファーム論	2	4	春		第1部では、ソーシャルファームの役割や可能性などについて考える。第2部では、ソーシャルファームが世界に広がっていることを理解し、またフランスやイタリアなどのいくつかの事例を紹介する。これによって、このソーシャルファームを広い視野で理解するようにする。続く第3部では、日本におけるいくつかのソーシャルファームの事例をみていく。これを通して、さまざまな社会的課題に合った解決方法が工夫され、支援と収益が可能となる事業が、どのように創り出されているのかを考える。					○			△
	地域マネジメント論	2	4	春		地域マネジメント論の中核的要素を、教科書や文献、新聞記事を通して学ぶ。また、実際にフィールドに出る経験や、各地域で見られる成功例を基にグループ討論やグループ発表を行い、実社会で役に立つ提案能力や問題解決能力を授業の中で養っていく。					○	○		△
専 門 応	インターンシップ	2	2	春		就職希望業界、企業を具体的に想定し、自分にとっての優先事項を理解し、自分のセールスポイントをイメージして、企業に赴き職場を体験する。しる後、更に学習する必要のある事項を整理して、今後の就職活動に繋げてゆく。			○	◎		○	○	
	◆ アクアグリーンフィールド学演習Ⅰ	2	3	春	○	演習を通じて生態系サービスの現状や将来性など、現状を高度な知見の集積により分析し、文献解説やグループディスカッションなどを行い、ディスカッション能力、さらにはプレゼンテーション能力、情報収集・整理能力の向上を図る。		○	○			◎	○	○
	◆ アクアグリーンフィールド学演習Ⅱ	2	3	秋	○	地域における生態系サービスの現状について、実際に産業として利用している事業者に見学や聞き取り調査をおこない、演習Ⅰで文献調査した内容と比較しながら問題点や課題を見つけ出す。		○	○			◎	○	○

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授 業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8	
用 科 目	◆ アクアグリーンフィールド学演習Ⅲ	2	4	春	○	地域において環境破壊や環境汚染などが発生していないか、水質等を含めた環境について調査を行う。調査結果をまとめ、環境の保全について調査結果をまとめる。		○	○			◎	○	○	
	◆ アクアグリーンフィールド学演習Ⅳ	2	4	秋	○	生態系保全について行われているアクションの改善点や改良点についてグループ討議を重ね、資料作成し、プレゼンテーションを行う。そして、これらの演習ⅠからⅣを学習することを通して、課題研究で取り組むテーマを採求する。		○	○			◎	○	○	
	課題研究	10	4	通年	○	学生の学んできた専門領域に関する課題研究の成果を論文に取りまとめる。その過程で、論文の構成や考察、文章執筆についての能力を培い、卒業後にそれぞれの職場で各種報告書の作成が容易に行えるようにする。		○	○	○		◎	○	○	
							◎	28	1	5	1	1	10	0	2
							○	9	28	21	11	10	10	13	10
							△	2	5	9	0	2	6	2	5
							合計	39	34	35	12	13	26	15	17